

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可  
昭和二十八年十一月二十五日發行  
毎月一回・十五日發行

(通第一七五号)

『教行信証』信樂釈……………近角常観…(1)  
(現生正定聚)

目 酒見忠勢先生 信仰講話……………西村正安…(7)

次 歎異鈔を読む心と……………室住熊三…(13)  
読まされるころ

堂 の 鈴(十三)……………佐藤強三郎…(14)

# 慈光

第十五卷

第十一号



# 「教行信証」信樂釈

近 角 常 觀

## 第九席

(一)

### 「信樂釈」(現生正定聚)

前席、前々席に於いて『涅槃經』の文を引かれ、今席の処は『華嚴經』を引きて『華嚴經』中に説かれたる信心の文をお示し下されたのであります。

こは仏教のことに明らかかな方は御存じの通り『華嚴經』には信仰のことが説かれてあり、信の一念に正覺しょうかくを成就するとの事が言われてあるのであります。故にこの他力の法門、殊に親鸞聖人のお示し下さる教に於いては、『華嚴經』とは意味の頗る同じき処がある。否同じきのみならず、『華嚴經』に信心の事を説かれてあるは、阿弥陀仏を信ずる他力信心のことである、との親鸞聖人の思召しなのであります。

即ち前席前々席の『涅槃經』の文に於いても「大慈大悲を名けて仏性とする」「大信心が仏性である」とある。其の大慈大悲は阿弥陀仏の大慈大悲、又大信心は阿弥陀仏の

り』

全く『大經』の第十八願成就の文と同じであります。即ち「この法を聞いて、信心歡喜して疑い無き者」とは、南無阿弥陀仏の六字名号を聞いて、信心歡喜乃至一念の者である。その者は「速に無上道を成らん」斯くの如き者は速に仏に成れる、というので、これは成就の文の「即得往生」と同じである。諸の如来と等しとなり、は諸仏如来と等しき身分にして頂けるといふので、即ち等覺の事でありませう。併しなからここで注意すべきは「等しき」と「同じい」とは、其の間になお一段の階段がある「等しい」とは、我々、心は信の一念に仏と同じ分にして頂くのであるけれども、身人生に在る上は、仏にはこの世にある間はなれぬのである。此の世を終り、我身が無くなれば、仏に成れるというところで、等しいとあるのであります。

こは他力信仰に於いては、大に氣をつくべき処で、此の間も誰か尋ねられたのであります。他力の信仰に於いては、一念に等正覺の位に至らせて貰うというのであるが、併しこの肉身の儘が、此世で仏になるというのではない。今氣のついた儘を申しますに、信仰には両面がある。

先日来お慈悲を頂かれた方々は、これまで種々人生の苦悩に悩み、我身の悪しきに苦しみ、又は自分の僅かなる善を頼みとして居つた処に、計らずも遣る瀬なき大悲のお心

仰せを頂きたる他力信心のことである、とある如く、今この『華嚴經』の信心も阿弥陀仏の大悲を信ずる信心のことである、とのお腹なのであります。

で、これよりこの御文をお話するにつき『華嚴經』本来の意味に引き当て、言う時は、種々六かしきこともあるのであるけれども、何も殊更六かしく言うに及ばぬ。私もちと調べて見たのでありますけれども、私にしても調べて一向感心せぬ。寧ろ聖人より言えば、聖人はあなたの信心の上より、其の儘すらくとお頂きなされたる事なれば、寧ろ御文の儘を我々の信仰上より直くと頂くが本当である。殊に一々の文字までが、皆他力の上にある御言葉故、字句の解釈を主とせず、唯すらくと信心の味を先にして、言うべき事あらば、後に申すことに仕度いと思ふのであります。

先ず『華嚴經』に言く。此の法を聞いて、信心を歡喜して疑い無き者は、速に無上道を成らむ。諸の如来と等しとな

を聞く一念に、恰も地震で総ての建物が一辺に倒れ、光景が一変した具合に、今迄の人生相對界の総てのものは皆たおれて仕舞い、人生真に有難きものは唯この広大のお慈悲だけじやとなりましたのである。

するとここで動もすれば、我ながら我を、仏とも言わば言える如き思いが起つて来るのであります。歡喜の一念には、兎も角、人生相對の繫縛から離れられるの故、昨日までの苦しみは、何故あの如き小事を苦にして居たかとなり、禪家に於いては見性と言うが、余宗に在りては即身成仏と言うか、敢て自から仏になつたと言いても、左程遠慮するに及ばぬ、というような者が出て来るのであります。

するとここが大事で、動もすれば茲で一面に「自分は何う悟つた。信仰を得た。自分はこれでよい」とよりの考が起つて来易いのである。すると頗る危険なのであります。他力信仰に於いては、我々自身が仏に成るといふことは無い。それは如何にも彼の仏のお慈悲頂いた一念は、人生長の迷いの根本を断ち切るの、そこは如何にも『横超断四流』である。故に如何にも此の世で、広大のお慈悲を聞き、安心した有様は著るしきものであるが、併しそれはここで長の迷いが切れ、未来仏と成るべき資格を得たというもので、未だ仏に成つたと言ふのでは無い。ここは大に氣をつくべき処なのであります。



それ故、信後と雖も矢張りもとの煩惱妄念はあり、性格ものこるのである。併し遺るは遺るが、それは恰も空に浮き雲の遺るが如く、又根の切れてある草木の水中に在りて花咲く如く、その根底に於いては根は切れて仕舞うて居るのである。

で親鸞聖人は『歎異鈔』に於いて

「煩惱具足の身をもてすでにさとりをひらくということ、

この条もてのほかのことにせうろう。云々」

それ故、我々どうあつても、煩惱具足の身を以て悟りを開くとは言えぬのである。何れだけ私共安心しても、煩惱妄念は止まぬのであります。

で、他力信仰の者は、いつ如何なる場合に於いても「自分が悪るかつた」と、広大な御慈悲に對しあやまり果てる。これが他力信仰の最も長所、最も特色なのであります。

よく今日の青年者は、「自分は絶対の心持に到達した」など言い易いのであります。これにつき、私はよく理解出来る故、言うのであります。先年起つた伊藤証信氏の『無我愛』の実験であります。私は彼の実験を非常に尊んで居るのである。併し遠慮なく批評するに、彼の実験は、無我愛を自分が体得したとなつたため遂に倒れたのであ

る。彼の人及び一味の方々が苦しんで居らるる処は、ここなのであります。それは自分が無我愛を体得し、自分が仏と成つたとなる故、仏に成つた以上は過去の悪しさが再び出て来ぬはずである。しかるにそれが再び出て来る処から、自分は充分、偉くなつたと、高上りした時、再び倒れたのであります。

禅宗では、故峨山和尚が「相撲を取るなら寝て取れ。初めから寝て懸れば負けやせぬ」と言われたという話がある。処が多くは「自分はもう信仰を得た。さあ来い」と力んで懸るから、如何なる人もいかぬのであります。

処が他力信仰の味は、「自分は実に悪い者である。煩惱具足の悪凡夫である。今まで、罪悪深重は十方衆生みなみである、自分もその一人だ位に思つて居たは、何たる不謙遜極まることであつたか」と、信の一念に、人間の眞価は、罪業深重の度し難き者であることが分り、広大な御哀れみに謝り果てる。すれば信仰に入れば、我身の悪しさに頭が下り、人から馬鹿にされるかというに、広大な仏力を頂くという点から言う時は、自分は斯くの如く、きたなき、穢れ果てたる、蛆虫同様の者である。然るにその蛆虫同様の者が広大な慈悲で、その者を見捨て給わぬ遣る瀬なきお思ひを知らせて貰ひ、満足した時は、仏はこの者を、実に「我が子である」「仏子である」「眞の仏弟子である」

と仰せられ、又諸仏菩薩は、この仏のお慈悲を知らせて貰いたる者は「我が親友である」と仰せられる。即ち見る影もなき自分をば、見捨て給わざる広大な大悲より、長々御苦労して、今日まで待ちかねて下さる。五劫思惟、兆載永劫の御苦労は、この蛆虫同然の私一人の爲の御哀れみとあつたと、頂くと、実に自分は極悪深重の蛆虫同然の奴なれども、その者が、その仏の長々の御大恩、大慈大悲を一身に受け、即ち偉大なる仏全体が、皆私のために与えられるのである。斯くして有難やと安心する所は、実に仏の不可称不可説不可思議の功德が、行者の身に充ち満ちて下さるのであります。

すると形は穢れたる凡夫なれども、お慈悲を頂いた手前より言う時は、即ち仏と等しいのである。肉体は何処までも有漏の穢身にして、飽くまでも煩惱の入れ物である。故にこの身は何処までも煩惱具足の凡夫なれども、其の者がお慈悲の上よりは、仏と等しき身分にして頂いたのである。斯く他力信仰は一面よりは極端に頭が下り、一面より無上の自信力が頭に来るのである。即ち世間的に言へば、謙遜という上よりは絶対の謙遜、又自信の点よりは、絶対の自信を生じ来るのであります。

実に他力信仰は、斯く一方よりはひどく頭が折れ、一方

よりはから意張りて無く、眞の自信を生じ来るのであります。併し茲は頂きそこなつたら、それこそ始末に畢え無くなる。若し眞にお慈悲頂かずに、唯形だけ頭下げて居るならば、それこそ偽善の極である。若し差し障りの無い為に唯ハヤ／＼と言つて居るなら、実に狡猾なるやり方である。又眞にお慈悲を頂くで無しに、唯空に力んで居るならば、それこそ実に剛慢である。これ皆この者を見捨て給わぬお慈悲を、眞に頂かぬ処より出て来る間違ひであります。故に他力信仰は、眞に仏の御哀れみを腹一杯頂かせて貰う所が無くてはならぬのである。

さて斯く他力では、此の世で仏に成るとは、どんな事ありても言わぬ。此の世では仏と等しき身分にして頂き、未来浄土に入つて、初めて仏には成らせて頂くと。これは『和讃』にも

信心よろこぶそのひとを

如来と等しととき給う

大信心は仏性なり、

如来すなわち涅槃なり

凡地にしてはさとられず

とありて、この世では信心頂いた者を如来に等しいとお説

き下され、弥々仏性を顕すは、未来安養に往つてからだ

御示し下さるのである。即ち信の一念に於いて、この世にありては正定聚不退転



の位に住し、弥勒菩薩と同じ果報にして頂き、生命終れば清浄土に入りて報土の眞身を得証すると言うのであります。処がこれが、今いう如く、真に信心頂いて言うなら間違ひは無きも、真に頂く処無くして言うと、間違ひを来たすのであります。

先ず従来説教を聴き慣れて居られる方は、信心を得たとて人間は変らぬのだと言われる。信心を頂いた後とて根性はもとの通りの人間故、信心を得たとて、得ぬ前と更にかわりはないのだと、言われるのであります。

してその信心とはどうかというに『死ぬと極楽に往生すると決定することだ』と合点して居らるる。これでは如何にも変わる所無い筈なのであります。

全体変わらぬとは、信後と雖も、矢張り旧によりて浅間しきこと、煩惱具是の凡夫なる事が変わらぬというのであります。併し信の上からは、根底に於いて煩惱の根が切れてある処、この点大かわりがある可き筈なのである。花は地上にある花も咲き、瓶中に挿した花も咲く。咲くだけ見れば、咲くに変わりはなければ、地上の花と、瓶中の花とは、根の切れてあるといないと大かわりがある。元来真にお慈悲頂いた人なら、広大なお心に接した一念、今までの心中の煩惱の根が切れ、変わるが当然なのであります。

一念、お慈悲の中に攝取さるるといふ味は、即ちこのなのであります。

然るに、この煩惱の根が切れ、変わる処が心にしつかり頂けて無い人が、従来の同行信者の中には沢山ある。それ故それ等の人にありては、信心々々と言つて居ながら、結局信心とは極楽往生と思ひ定むる処が信心じや、と言うやうのことになり、何時まで経ちてもはつきり句切りが着かぬのである。前席に於いてやい／＼噎しく申しても、結局ここ一つを申したかつたに過ぎないのであります。で斯く他力信仰には、信の一念、明かに自分の心持ちに変わる処があるのである。

猶ほ遠慮なく申すに、総ての人が、家庭問題で試さるるが最もよいのであります。老人が寺に参詣し、寺で念仏称えて居る間は心安らかであるも、家に帰れば忽ち面白く無いとの念が往來するようならば、其の信心は頗る危いのである。何故なれば、真にお慈悲頂いた者なら、斯る家庭の五分五の争いに何時までもつきまとい、あゝこう云う事無い善なのである。何故なれば真に片方にお慈悲頂けば今までの五分五分の源が断たれる故、必ず心に「らくな処」が出来て来る。若しそれでないならば、甚だ怪しいのであります。

しかるにここで従来の大抵の人は「信心頂いても善し悪

す。然るに変わりが無いと思つて居られる方は、其の實、煩惱の根が切れどもうもして居ないのである。それ故、それ等の人にありては「その様な浅間しき者が、極楽に往けると思ひ定むるが信心じや」という様な事になる。それでは信の一念に正定衆の教に入るといふ所が更にならないのであります。で、それ等の人にありては死ぬる時が最も肝腎になつて来る。死ぬと極楽に往けるという処が信仰の極所になつて来て、信の一念にお慈悲を頂くといふ味が更にない。

『正信偈』には

貪愛瞋憎の雲霧、常に眞実信心の天に覆えり。

譬えば日光の雲霧に覆われるども、

雲霧の下、明かにして暗なきが如し。

とあつて、成る程信後と雖も、貪愛瞋憎の雲霧はかかる事はかかる。かかるけれども、雲霧の下あきらかにして暗が無いと、明に示されてあつて、暗あると、暗の無いとは大違ひである、斯く貪愛の雲霧はかかるけれども、其下、あきらかにして暗が無いという処が無くてはならぬのであります。

で信後と雖も種々煩惱はあることはあるけれども、真にお慈悲頂いた上からは、根底に於いて根が切れ、生死の迷いから全く離るる処があるのである。他力信仰に於いて、信の

しの煩惱は止まぬと仰せられるから」と、甚だ横着に構えて居る。

そんなことは決して信仰には無い。「むしろ今まで善し悪しと言つて居つた者が、広大のお慈悲頂けば、「人の悪しきは自分が悪しかつたのである。人の隔てたは、自分が隔てた故、人も隔てたのである。自分じやとて今も決して善く出来るとは言えぬ」と、強ち家庭の不和が心地よくはなけれども、其の間をお慈悲一つに安んじて行けるが信心の有様である。

こは従来説教を聴きつけた方、……又青年者でも信仰慣れのした人の間にこれがあるから、大に注意せねばならぬのであります。

未完

### ひとつばなし

貝が天気の好い日に大口開いて日向ぼっこして居つた。貝の親が、

『そんなことして居ると人間の奴がつかまえて来るぞ』という、貝の子が

『その時はすぐに戸を立てる』と答えた。すると親貝が

『ナニ人間の奴は家ごと持つて行くから注意せねば』

と言つたという。 「求道」十四卷三号所引。



# 酒見忠勢先生信仰講話

西村正安

(註) 昭和八年三月十六日、香川県師範学校記念館にて、  
同校五年生、四年生、三年生及び三部生のために講  
話されました。その時の手記でありますが文責は記  
者にあります。

私は今回皆様にお話申し上げようと思つた主題が三度も変更  
りました。初め大山先生が私方へお見えになつて私がこち  
らに参るお約束した折には、「宗教の真髓」という題でお  
話申し上げようと思つて居りました。将来教育界に立たれる  
皆様に申上げのお話であるとすれば、それは宗教の全般に  
わたり信仰的な事柄をえらんでその真髓を筋道立ててお話  
を申上げておけば、何かの御参考になることもあるであろ  
うと思つたからであります。

ところがその後になつて承ると、信仰の眞の味を知り  
たいと希望せらるる方があるように聞きましたので、それ  
なら池山先生の入信の経路について御話するのがよいと思  
うよになつたのであります。池山先生は第六高等学校の  
教授で、実に温厚篤実な方であります。そして光明界裡に  
御生活なさつて居らるるお方であります。

お方には、極めて良い御縁とならうと思つて居る次第であ  
ります。

只今、大山先生から承ると、ここに二部の方が居られ  
て、そのお方は初めて信仰の話聞かれるそうでありま  
すので、そうした方には池山先生のお話はお分り  
難いかも知れませんが、それより西原礼造君の心機一転のこ  
とについて申上げる方がよい、西原君の入信の有様は、実  
際問題について色々起きて来る悩みを解決するものに参考  
となる点が極めて多いだと私は考えました。断様なわけ  
で今宵は西原君のお話を申上げること致します。

○

私も斯様な体験を持つて居ります。私は若い時代には色  
々と修養を試みたものであります。そして遂には少しも怒  
らないということをやつて見ました。外のこととは割合に容  
易に出来ましたが、この怒らないと言ふことはなか／＼困  
難でありました。しかしそれも三年程の修養の結果で漸く  
出来るよになつたのであります。私はそれから東京に上  
り勉強することとなつたのですが、その当時、私は物質方  
面に大変困窮して居つたのです。その上にまた眼病に悩ま  
されたのであります。それはかれこれ半年程も続いたで  
しよう。

池山先生の入信過程に強くそのお心を射た御文がありま  
した。それは教行信証行巻の「大悲の願船に乗じて光明の  
広海に浮びぬれば、至徳の風静かに衆禍の波転ず」という  
親鸞聖人の御言葉でありました。

池山先生はこの「大悲の願船に乗じて光明の広海に浮  
ぶ」という、初めの半分をお味になりましたが、後の半  
分、「至徳の風静かに衆禍の波転ず」というところが、体  
験的にお味いになれなかつた時、奥様が胃痛になられて、  
それを機縁に信界に入られ、ご一家が悲惨の中に、念仏に  
生きかえられるよになられて、遂にその深義「衆禍波転ず」  
をお味いになりました。

元來人生々活には暗黒と光明との二方面がありますが、  
その光明の生活についての味いは、道を求める人には大抵  
は味わ／＼れるものであります。眞実の信心には「至徳の  
風静かに衆禍の波転ず」という味いがありますが、これが  
なか／＼分らないのであります。

池山先生の御体験をお話すれば眞実の信仰を求められる

私はその折に八人を怒らせることが大変好きでしかもそ  
れが極めて上手なVという人に出合ふよになつたので  
す。当時の私は物質の不如意と身体の病氣のために非常に  
心を痛めて居りました。その折も折とて、かような特徴の  
人に出合つたのでありますから、私の永年の修養、即ち八決  
して怒らないVということは一度で破られてしまつたので  
あります。

怒つたのでは「衆禍の波立たず」ということにはなれぬ  
のです。私はその時につくつく思い知らされました、

△所謂、修養で築き上げた心持や習慣等というものは、  
なかなか徹底しないものだVと。

それから私は、眞実信心には△至徳の風静かに衆禍の波転  
ずVと言う味いがあるが、それはまことに甚深微妙な味の  
あるものであるということを知つたのであります。

池山先生が苦しまれたのもこのためであります。いやし  
くも信仰生活をする者は、どうしてもこの味いを体験せね  
ばなりません。もしこの味いが分らなければ、眞実の信仰  
が半分だけ分つたので、不徹底な信仰といわなければなり  
ません。

人生々活に信仰が徹底してくると必ずやある転向を見る  
ものであります。西原君の入信の経路にはいちじるしく  
この味いが現われて居ります。



私は大正九年の頃病気をしました。その翌年大正十年にはある事情のため一日後れて夏期求道会に参つたのであります。西原君の御話はその時の出来事から始まるのであります。この夏期求道会は夏の七日間、東京の求道会館で近角先生の教行信証の御講話がありました、それは十二年間も、毎年々々続けられたものです。その講話が終つて第八日目には、浅草の別院で報恩寺の教行信証の真本の拝観を差し許されることになつていたので、一同打ち揃うてこれを見学することになりました。……………

さて私が求道会館に着いて講堂の裏手の室に入りますとそこに年の若い見馴れぬ紳士が座つて居られました。近角先生は、早速、

「この方は香川県の人で弁護士で県会議員をしている酒見君で、この方は西原礼造君で今は真劍の悩みをしている方である」

と私を西原君に紹介して下さいました。

その頃は会館の直ぐ前の桜館という下宿屋に泊つて居りました。西原君は小松川というところで会館まで二時間もかかる遠方に住んでいるということでありました。そこで私は西原君に

「私は直ぐ前の桜館に居るんですから御都合のよい時にお遊びに来ませんか」

「私は只無意味にやつて来ているのです」というのであります。

それから色々話し合いましたが、西原君が身の上話をしてくれて、真劍の悩みが何であるかを詳しく承りました。

西原君は明治専門学校出身の技術家であります。現に先達も福岡の放送局から五日間も連続して「化粧品について」という講演を放送した人で、其の方面の知名の技師であります。

西原君は学校を卒業すると直ぐ或る会社の技師長になりました。そこで西原君の発明した或る化学製品を造つて売り出すことになつた。ところがそれが実験の時には完全に出来るものであつたが、これを商品として製造する段になつて失敗をした。それから更に数度の失敗を繰り返して研究と実験とを重ねて、今度こそは愈々大丈夫という自信を得るに至つた。会社の重役も非常に喜んで、会社で大勢の名士を招待し、新聞記者の立会を願つて、これを世間に発表することになつた。

西原君はこの大切な事業に直面し、愈々自分の責任の重大なことを痛感し、一生懸命に其の職工の訓練にも細心の注意を払い、殆んど不眠不休であらゆる準備をして、今度こそはと自分も信じ重役達も充分期待していたのであるが、どうしたことかまた失敗に終りました。

と誘つておいてその日は別れました。その後西原君は下宿に来て勧めるままに食事を共にしました。その最初に

「貴方は弁護士で県会議員だということであるがそれは本当なんですか」

「そうなんです」

「貴方は仏様を信じますか」

「え、信じます」

私が斯様に答えると西原君は小首を傾けて又いふのです。

「変です」

「どうして変なんですか」

「そのお身分で仏様を信じるといふのはどうも変です」  
「私は仏様を信じて居ればこそこの遠方の東京まで参つて居るのです。私は職業柄、家に沢山の用件があるので、それ等を打ち捨てておいてここに来て居るといふのは仏様を信じればこそであります」と云いますと、

「どうも変です」

と繰り返し／＼いふのであります。そこで今度は私が

「貴方はどうして会館に来られたのですか、それがどうも変です、……………貴方は仏様を信じないのですか」

「え、信じません」

「信じないのに何故近角先生の所に来られたのですかと尋ねますと、

西原君の失望落胆は非常なもので、それは只自分だけの問題でなく会社の面目までまる潰れである。その責任を思つて悩ましくとも耐えられなかつた。その時ふと身体がふら／＼としたと思うたが、その後はどうなつたのであるかちつとも分らなくなつてしまつた。

君は全く夢中で方々を歩き廻つた。それから市内の何処かで短刀を買い求めた。そして市内の某旅館に宿泊した。

ところが、その旅館の主人が西原君の顔色の平常でないのを見て、これは只事ではない、と女中にその様子を見守らしていた。ところがその女中が用事で下に降りたわずかの時間に自殺を企てたのである。

西原君はそれから何日程経つたか分らない、自分では死んでしまつたものと思ひこんでいた。現か夢か、死か、ただ朦朧として気がついてくるとそこには西原君の妻君の兄さんの顔が現われて来た、そして

「お前は実につまらぬ奴だ。妻や子供を養ひもせずこれ等を此の世に残して苦しめて居るといふのは如何にも不甲斐ない輩じゃ」

と叱つて居るように見えるのである。西原君はそこで「自分は責任を感じて自殺までした者である。それであるのに、死んだ先まで追つかけて来て叱らないでもよさそうなものだ」と思つた。



その翌日には会社の重役の顔が現われて来た、また西原君は思うに、

「自分は会社の名誉を傷つけましたが、それは実験出来る筈のものであつた、それが失敗したには色々の原因がある。あながちに只自分一人の罪ではない。それに自分は責任を負うて自殺したのである、それなのに会社の人はこの自分を死んだ先まで追いかけて自分を責めなくてはよきやうなものだ」と。

斯様な思いに悩まされて幾日かを通ぎると段々周囲が明るくなつて来た。それから自分は死んでしまつてゐると思つてゐるのは間違いで、自分は生き返つてゐるものであるという事に初めて気がついた。……………

そうなつて見ると妻君の兄さんや、会社の重役の顔が見えたのは自分を責めるためでなく、皆自分の容態を心配して親切に見舞つてくれていたのであると分つたのである。

その後退院出来たが西原君は大変厭世観を抱くようになりまた何時自殺するかも知れないという具合なので、近親や友人はいろ／＼心配し、何とかしてその心を思い返させようとした。それには座禅が一番よいということで、鎌倉の円覚寺に参禅させることになつた。ところがこれは西原君の妻君やそのお母様等の婦人達が「鎌倉は遠方のこと

男甲斐性なしめ、妻や子供さえ養ひもせずにVと言つてゐるやうな顔付に見えるのです。又妻の母親も私を始終見下げますAこの意気地無し奴、死に損ない奴Vと言つてゐるやうに見えます。私は兄弟夫婦の家に同居してゐる者でありますから、その人達までが私を責めてゐるやうに思われてなりません。こんなことで家に居るのが非常に苦痛なのです、そこで家を出るのですが、外では左側通行でありますので道の左側を歩いていきますと、私の首に傷の跡形が大きく残つて居りますので、道行く人は皆これを見詰めます。そしてA自殺の仕掛いが通つてゐるVと言つてゐる風なのです、それも私の心を非常に痛めます。私はその傷跡を見られまいと家の方に寄つて歩きます、すると今度は家の中の人が私の首を見詰めるのですAあそこに死に損いが通つてゐるVと言つてゐるやうであります。こんな具合で人という人は悉く私を嘲つてゐるのでありますから、その苦しさは口にも筆にもつくせません」

西原君はなお語ります。  
「私は全く苦しいのです。その心持を先生に訴えると、しみじみ御同情のお言葉を下さるのですが、その苦悩の解決についてはちつともお話がありません。只仏様のお慈悲のことばかりを話されるので、私はAもうここへは来まい、この一度だけで後は来ないようにしようVと思ひ乍ら家に帰つたのです。

翌朝になつて起きて見ると、妻は色々私の身の廻りの世

であるから心配でならない、それに坊主になつてくれば困る」という承知しない。そこで東京市内の道場を探してゐるうちに、広島文理大学の教授をしてゐる友人から「近角先生の所が一番よい」と手紙で知らせて来た。こんなことで会館に来るやうになつたやうである。

それから西原君が言うには

「私は先生に身の上話をしました。そうすると、近角先生は、そうでありましょう、それはさぞ苦しいでしょう、と非常に御同情下さつて色々御親切なお言葉をいただいたのですが、さてそれから、先生は只仏様のお慈悲がどうのこうのと、そのことばかりを言われるので、私は全く失望してしまいました。私は煩悶を解決して貰うために先生をたずねてゐるのに、先生はその点は少しも言わないで、只仏様のお慈悲許りを言うのではありませんか。今の私には仏様のお慈悲がどうであらうと、それはちつとも必要がないのです。それよりはこの心の悩みを解決して下さいればそれでよいのであります。それなのに先生はそれには一言も触れないで仏様の御慈悲ばかりを話されるので、私は失望してしまつたのです」

西原君は煩悶を更に打ちあけて申しました。

「家に居ると妻は始終私を嘲つて見詰めるのですAこの話をしてくれませんが、その顔には私を嘲つてゐるものが見えます。話をきくと私の不甲斐なさを叱つてゐるやうに聞こえてなりません。茶の間に飯を食べに行くと、そこに妻の母親が何かいふのですが、それが皆私を嘲り責めてゐるやうに思われるのであります。こんな具合で家に居るのが非常に苦悩なのです。これではならぬと、気晴しに外出すると、そこにも又私の首の傷跡を見詰めてあざけつてゐるやうなのです、市中を歩くのも苦痛であります。

只求道会に来ると、私を嘲つたり責めたりすることが少ない様に思われるのであります。それで来るやうになるのです。近角先生は、相も変わらず私に非常に同情下さり、さぞ苦しいでしょうと言われます。然し私の苦悩の解決については一言もお話がないのです。

近角先生は、こんなに言つて下さいました。貴方はさぞお苦しいでしょうなあ、あなたの苦悩を仏様はやるせなく御同情遊されて居られます、この人間界には貴方を慰める人はないでしょうが、仏様だけは貴方を慰めて下さいます。それは深い／＼御同情をなさつてゐるのであります」

と、西原君は言い続けます。

「私は近角先生からこんな御話を聞くだけで初めの日も次の日も、何も得るところなく過しました、更に三日目になつたのですが、家に居るよりも、街に居るよりもましだから私はその日も近角先生の所へ参る様になりました云々」

未完



# 歎異抄を読む心と 読まされるころ

室住 熊三

重病にかゝり死線を越えた人が歎異抄を胸にいただき、繰りかえしまきかえし熟読した事をしばしば耳にする。処が病が癒えて日が経つに従つて、これまでの感銘の薄らぐ有様を見る。これはどうしたことだろうかと私は思つた。このことについて私は読むということと読まされるということを感じた。

病気が重く死を目前に控えた心の淋しさ苦しきから何ものにかすがりたい、これは人間の自然の情である。しかしよく反省して見ると、これは生に執着した欲望による妄執である。この妄執に依つてむさぼるように生命の糧なる歎異抄をむさぼり読むのである。我執によつて読む、これによつて心の落着きを得て病が癒えるると何時の間にか歎異抄にも遠ざかり俗事に心をうばわれることになる。此処を近角先生は懇切に注意されたことを今に思い出す。こういう

状態の人の事を、私は歎異抄を読む人で、読まされぬ人であると云つて見た。

以前聞くと聴こえると云う事、観と見と云う事を書いた事がある。自ら求めて聴聞を重ねて居るうちに、仏様の御呼声が聴こえて来る。自ら尊いものを求めて観て行くうちに、向うからあらわれて見えて来る。これが見る世界を縁として見える世界に転ずる御廻向の世界である。病に悩まされて自ら歎異抄をむさぼり読んで居るうちに、読まされてくる御廻向の世界が開ける。成るほどとうなずく世界が開ける。これが感応道交の世界である。この世界まで至らずに読むだけで終つて居る人が多いのではなからうか。深く心すべき事と思う。

御彼岸の中日に感ずるまを誌して見ました

昭和三八、九、二四

## 堂の鈴

(十三)

佐藤 強三郎

### 病青年と語る (一)

手塚の母は三男の雄三が、気を取り直して、会社へ通うのを見て安心してよろこんだ。

今度、妹の長男が中学を卒業して工業学校へ入学志願だと聞いて声援を惜しまなかつた。

手塚の母は「子供の入学は、親が真剣にならなくては駄目ですよ。シツカリ、やりなさい」と、妹と二人でそれら夢中になつた。学校の先生を訪問して指導方法を相談するのは勿論、他の受験生の様子を聞いて歩くやら、占師の運命判断をやつたり、神社仏閣へもお賽銭を奮発した。その子供は中位の成績で、学校でも家庭でも入学は大丈夫と、心ひそかに期待していた。

処が意外にも入学試験に落第してしまつた。

手塚の母「来年もあることだ。力を落さずにやりましょう。人間は、人の力量、人の運命をみんな知ることは出来ない。だから、先生も子供も、親も見当がはずれることがいくらかもある。又、思いがけない仕事をやって、意外に成功した人も少なくない。あきらめずに、今度また大いにやりましょう」と沈んでいる妹を慰めた。

雄三が会社をやめると云い出し色々苦悶した頃、同じ課の桜子さんは何くれとなく雄三を慰めてくれた。雄三が思い返して又会社に勤める気になつてからは、今まではよりは一層親しく近よつて来た。

雄三はそれを喜び、心ひそかに結婚をも本気になつて考えていたのである。

.....

このようにして二年位も過ごした時、雄三は腎臓病にかかり、急に入院した。

当時、次兄は会社が解散したので失業して居た。長兄は先年、長患いの後に死んだ。そのため現在一家の経済は雄三の腕にかかつていた。

入院と聞いて、一家は愕然として色を失つた。それなのに病氣は段々重くなつて行き、遂に治る見込みも薄らいできた。母は気が気でない。家中、溜息ばかりついている。



雄三は一人で寝ていると、色々の思いが浮んで来る。八会社で辞表騒ぎに夢中になつてゐるときから、桜子さんはどうしてあんなに親切にしてくれたのであろう。高女出で、自分より三つ位年下である、……自分の病氣はどうして治りが悪いのであろう。もう治らぬのかも知れぬ。早く治つて会社へ出て、思いきつて桜子さんと結婚して大いに活動しよう。そしてこんなにあふさいでいる氣分を一掃したいものだ……

その間、一郎はお茶やお菓子など持つて時々見舞に来て慰めてくれた。雄三も母も、心から感謝して、友情はありがたいと語り合つた。然し雄三の病氣は段々悪くなつて行くばかりである。或る日雄三の母は一郎をたずね、母「一郎さん、雄三の病氣は治る見込みが全く無くなつたと、医者が言いました。それに会社の桜子さんはもう二十五も過ぎたので、家の人も氣をもんでいたので、先日縁談がきまつたとのことです。雄三もあの人に心を寄せていたようですが、桜子さんが他所へお嫁に行くときけば、ガツカリするでしょう。そのため病氣が一層悪化しないかと、私までが心が暗くなります。どうしたらよいでしょうか」

茶花も盛り。鉄瓶の湯はタギツている。雀が一羽、石灯籠にとまつた。病人は「アア、アア」とためいきをつく。信哉は一旦病室を出て家人と相談した。家人は「どうか思い切つて、何でも話して下さい。実は、医者も今度は絶望だと云つてゐるのです。それを本人に聞かせたいのですが、どう聞かせて良いものか、心配して困つて居ります。どうぞよろしく頼みます。……」と真剣である。病室へ帰つて見ると、雄三は一人で、頭が痛い、息が苦しい、と顔をしかめて沈んでいる。

枕元に、しばらく正座していたが、やがて、信哉「青年、前途洋々たる人生を望み、工業大学を卒業し幸に良い職業につき、これから大いに働こうという時になつて意外にもこんな病氣になつて、病床に涙を流すとは、いかにも悲しいことでしょう」と慰めると、病みやつた青年は涙ながらに語り出した。雄三「毎日苦しいばかりです。私はどうすれば良いかわからなくなつてしまいました。長兄は若くして死に、次兄は失業、私が大いに働こうと張り切つてゐたのに、私も病氣になつてもう一年余り、いよいよ家の経済も苦しくなつてきました。私の病氣は、もう治らぬでしょう。」

一郎は、雄三を慰問する毎に母から哀しいことばかりを聞かされた。そこで信哉さんを病人に会わせたいと、色々と斡旋した。

信哉は、或日手塚雄三の病氣を見舞い、一人で病室へ入つた。雄三「御見舞下されてありがとうございます。私は駄目です。どうせ治らぬものなら、いつそ早く死にたい」信哉「そうですか。人間の寿命は誰にもわからない。氣を落さないで養生なさつたらよいでしょう」

雄三「私もそう思つて、悲観せずに、養生しようと、努力したのですが、いよく駄目らしい。その上、家庭の事情から呑気に療養して居られないのです。どうせ生きる見込みのない者が、人に迷惑をかけ。自分も苦しんで無駄に生きてゐるのは、堪えられません。家の者も、口にくそ出さぬが、腹の内ではそう思つて苦しんでゐるのでしよう。互に人目をはばかつて、ぐずぐずしてゐるのです」信哉は「これは思つたよりひどい。このままにして置けば、ヒョットすると、大変なことになるらぬとも限らぬ」と感じた。もう秋だ。だんだん寒くなつていく。柿が赤く実り、山

そのことを医者も家人も私に云えぬのですね。

私は大学時代から少々哲学の本なども見たのですが、良くわかりません。人生は不可解と云うが、まだ納得のいかぬうちに死ぬかも知れません。それは丁度旅行中、まだ目的地に着かぬうちに路に迷い、日が沈んで行き詰つてしまふようなものです。大いに成功して幸福な人生を送り、只一人の母に榮をさせたいと願つたのですが、私の方が先に死ぬかと思えばたまりません。母も不当に氣の毒です。先日も私より若い青年が急に कोरोリと死にました、今度私の番か?とも思います。……」

雄三「少年の頃から母から信心の話をきいて居ました。そこで、信仰の力で力強く出世の路を開き、大いに活躍しようと思つてきたのですが、それも今は夢です。又、病中念仏を申し、念仏の力で早く病氣を治したいと思ひますが、毎日氣がイライラして、チツとも落着きません。母に優しい言葉の一つもかけてあげたいと思ひますが、機嫌の悪いことばかり。口には念仏を唱えていますが、心の中は妄念、妄想ばかり。他人が有り難そうに念仏してゐるのを見れば八あんな甘いうわすつた念仏なんか何になるものか。ひどい目に遭うと一遍に消えてし



まうぞVと、内心慙蕩したくなります。

それにまた元気で楽しそうに暮している者を見れば、美しくて仕様がな。そして心に八色は匂えど散りぬるをわが世誰ぞ常ならむ、というのに、あんなに有頂天になつて人生を楽しんでるが、すぐ消えてしまふぞ、驚くな！Vと、罵りたくなる。遂には元氣よく愉快に暮している人達が憎くなります。

失敗ばかりしている者は、世の成功者をうらやみ、ねたみ、憎むというが、私もそうなつて来ました。どんな立派な宗教があつても、自分の様に重病になれば最早深く味う氣力が無い。読書もつかれていやです。話すのも大儀です。修行なども思いも寄りません」

雄三「いかにえらい人が、立派に人生を解決したと聞いても、それはその偉人だけのことです。

富士山頂の眺めが、どんなに美しくとも、登れぬ私には夢に過ぎません。いかに眺望がよく愉快であると聞いても、羨しいばかりで、しまいに腹が立つ。人の幸福なんて、チツとも祝福する氣になれません。私は人生の長い途上に、背負い切れぬ重い石を荷つて、つぶれているような氣がする。アア、もう何もかもわからなくなつてしまいました。立ち上る氣力もない。

信哉「あなたは死にたいと云うが、死んだとて楽になるでしょうか。死というものは、この明るい部屋から、敷居をまたいで闇い部屋へ行くようなものでないでしょうか。

こちらの部屋で苦しんで、腹を立てて、人を呪つていたものが、敷居、即ち死をまたいで……そのまま隣の世界へ行つたとて……矢張り苦しみは同じでないでしょうか」

すると突然病人は、むくむくと床からはい出た。雄三「それじゃ、どうすればよいでしょうか」というなり部屋の中を這い出した。

信哉「行くも死、止まるも死、帰るもまた死。人生無常、然も生きて解決しなければ、死してなお苦悩の連続でしょう。生死流転……永劫の輪廻……我々凡夫ではどうすることも出来ません。我々からすれば、どうする方法もありません。泣くただけです、狂うただけです。その様にどうする方法もないからこそ、それをかねてし

ろしめして、汝をあわれみ、汝をたすけ遂げずんば、我も亦正覺を取らじ、と無限の大悲をもつて、本願を建て下さつたお方があるのです」

どうせ死ぬなら、せめてもう一度戸外へ出て、青空の下で思ふ存分歩いて、大声で歌い、腹一杯空気を吸つて見たい……」

と外を見た。日は暮れて行く、赤蜻蛉の飛ぶのがだんだん見えなくなつて行く。二人とも無言。雄三は粉薬の袋を探した。手がふれて枕元にある雑誌がくずれ中から女の写真が出た。恋人桜子のであろうか。

雄三はそれを知るや、あわてて又雑誌の間へはさんだ。信哉は眼をそらした。

雄三は向う側に顔をむけ、そして思つた。八初めて氣に入つた彼女だ。自分が達者な時には、何くれとなく親切にしてくれた。それなのに自分が重病となり、いよいよ見込みないとなれば、早速他へ嫁に行つてしまふ。これは彼女の本心ではないだろう、家の人達にすすめられたのである。俺は、結婚もせず、家庭も持たず、子供の可愛いことも知らず、まことに味氣ない一生を終るのか。人生の意義も悟らず、恋もせずに行つてしまふのか。……信哉さんが居なかつたら桜子の写真を出して、もつとよく見たいのだが、それも控へ目にとは淋しいV

信哉は、静かにキチンと座り直し、雄三を見つめた。雄三は正しく眼を据えた。

信哉「唯、その不思議の本願を信じ、念仏して往生するばかりです。私にはそれが唯一の道です」

信哉「阿弥陀様は、貴方がいつ死ぬか分らぬ不安な氣持でいることを、あわれんで下さるのです。

いよ／＼生きられぬと自覚すれば、健康な人を羨み、ねたみ、遂にはなぜ自分ばかりが、こんな不幸な目にあうのかと、世の中の不公平を呪つて、世を恨み、人を恨むような氣にもなる。

又、早く病氣が治つて、母に樂をさせたいと思つても出来ない。毎日イライラするばかり。そのために病氣を悪くし、だんだん身体を弱めるばかり……。嗚呼、人を羨まず、呪わず、良い氣持になつて養生し、一日も早く活動したいと思うが、そんな立派な心になれない……。

そしてこんなつまらぬ、あさましい心の中を人に打ち明ければどんな人でもあきれるだろう、と遠慮し、恐れて人を隔てるばかり。かくて自分の孤独をかなしみ、自分のあさましい心にあきれて、驚くでしょう」

信哉「処が思いがけなくも、自分がこんなあさましい心の者であることを、かねてしろしめして、そのものをたす



けん、待つていて下さるのです……。

金があれば十分養生も出来て早く治るだろうが、金が無いので思うように医者にかかることも出来ない。悲しいことだとも思う。

然し金があつても、名医の力でも、病氣は必ず治せるとはかぎらぬ。金にも限りがある。科学の力にも限りがある。何時までも生き通すことは出来ません。それなのに、我々の望みだけは限りがない。最後には必ず行き詰まる。どんな人でも行き詰まる。だから苦海というです。娑婆というのです。」

………

信哉「あわれむときけば、私のこの病氣を早く治して下さい。死ぬのを早くたすけて生かして下さい。もし病氣を治すことも出来ず、生かすことも出来なければ、そんな口先ばかりのあわれみなんか何の役にも立たぬ。そんなものが有り難いものかと反抗する。然し死を助ける事が出来るならば、人生は無常ではない。何事をも満足せしむる方法があるならば、人生は苦海ではない。あはれみはいらぬのです。宿業のため、一分一厘自由に動けぬ者なればこそ、その者をあわれんでいかに世を恨み人を呪つても、それをよく理解してどこまでも呆れず、見捨てず、たすけ遂げずんばおかぬという本願を建

ましようか」

信哉「あります。悪からんにつけてこそ、そのものを見捨てられぬ、どこまでも救つてやらねばならぬと云うのです。私も聞かせて貰つたのです。……。

よくなるうとしても成れず、悪が止まぬので困つて居る。このままでは遂には氣違ひになるのでないかと思ふ。氣違ひになつて生きて居る位なら一層死にたいと思ふがそれも出来ない。ところが長患いとなれば、そう思ふのも無理はないと、深く察して、こんな自分をよく理解し、あわれんで、業報のためどんなことにならうとも、それを何処までも呆れぬというのです。……。

煩惱多く、孤独で悩んでいる私の姿を、その通りみんな知つて、その上で、その悪を止めようとしても止めることの出来ないことを憐れんで、どこまでも呆れない、という不思議のお心をききましょう。

どこまでもとは、ホントにどこどこまでもなのです。しきりが無いのです。無碍です、無限です。

いかに大きな固い氷でも、それをどこまでもとかさなければやまぬ、無碍の光明に照らされれば、しまいにはとかさるでしれよう……。

雄三は思い出しては色々々いた。

雄三「本当に親切な慈悲深い人があつても、世の中の大勢

て下さつたのです。

この世において、自分に出来るあらゆる治療をやつて見ても、どうしても治らぬからこそ、それをあわれんでどこまでもお呆れにならないのです。」

………

信哉「貴方も病氣は治りたいでしょう。然し治らぬかも知れぬ。無駄に生きて、人に迷惑ばかりかけて居るよりいつそ、早く自殺してしまいたいと思うかも知れぬ。だがそれも出来ない。

人の力には限りがあるから、いくら他人に訴えても、この苦悩は治すことは出来ぬと思えば、無限に湧いてくる苦悩を打明けける氣にもなれない。そして人をうらやみ、ねたみ、憎み、隔てる。こんなあさましい心を打明けければ、人は皆呆れてしまふだろうと思えば、言い出すことも出来ない。そして一人で苦しんでいるのです。真に孤独です……。」

………

信哉「我々は価値の有る無しで生きて居るのではない。自分の宿業で生きて居るのです。宿業とあらば、生きたくとも死なねばならず、死にたくとも生きなければならぬ。人生無常、真に孤独です……。」

雄三「悪いと知つても、それを呆れないようなものがあり

の人が、五分五分根性で色眼鏡をかけて見れば、自分は矢つ張り駄目になつてしまふ」と淋しげに見上げた。

信哉「私共自分の悪さを知つて呆れないお方が一人位あつても、世の中には呆れる大勢の人が居る。一人位呆れない者が居ても他の者が呆れ、馬鹿にすれば問題は解決しないと云うであろうが、そうでないのです。

………一人で全部が解決されるのです。………その代りその人は、どこまでも見てくれ、呆れない者でなくてはならぬ。その人がどれだけでも見てくれるに於いては、四方八方から債権者に取り巻かれて仕様の無い場合に於いても、唯一人でよい……どれだけでも入用の金は全部引受けると云うてくれるならば、その人、一人で解決する。……他力の味いは一にここに有る。……と聞いて居ます、信じて居ります」

………

「お宅も真宗だそうですがお正信偈を御存じでしょう。その終りのところに、

無辺の極濁悪を橋渡(救済)したまう

とある。無辺とは際限がないことです。どこどこまでもです。御和讃には

光雲無碍如虚空 一切の有碍にさわりなし



光沢かぶらぬものぞなき 難思議を帰命せよ  
とある。無碍、即ち碍りなしです。無辺、無碍、難思議、不思議、といろいろの説明がありますが、これはみな、五分五分はなれたものであって、私共の考の及ばない、どこどこまでもということなのです。

「尽十方無碍光如来の本願を信する念仏者は無碍の一道なり。そのいわれいかんとなれば、信心の行者には、天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし。罪悪も業報も感ずることあたわず、諸善も及ぶことなきゆえに無碍の一道なり。」

十方を尽くしてさわりのない如来の本願力を信するからです。弥陀の本願をさまたくるほどの悪なきがゆえです。罪悪も業報も感ずることあたわずです。

遠慮はいらぬ、狂いなさい。泣きなさい、さわきなさい。生きようが死のうが、狂おうが、それは皆あなたの宿業のためです。だれも止めることは出来ないでしょう。またさせることも出来ないでしょう。宿業のためいかなる事が起きてくるかも知れません。しかるに仏かねてしろしめして、煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくの如きの我等が

吉田松陰先生母堂の書簡

松陰先生三十歳。野山の獄に幽せられて、「われに誠足らざるなり」との自責のあまり、絶食致死を企てられました。その時、父君や叔父君から、切々とした書面をもつて絶食を廃するよう申入れられました。然し松陰先生の心を動かさず、「我あやまてり。順の一字を始めて知らされた」と述べさせたのは、この御母堂書簡でありました。

一寸申しまいらせ候。  
そもじ様、いかが御くらしなされ候や、さきほどに不慮の事うすうす耳に入り、あまりきづかわしさに申し進じまいらせ候。  
きのうよりは御食事御たちとか申すことよし、おどろき入り候。万一それにて御はてなされ候ては、不孝、第一口おしきしだいにぞんじまいらせ候。  
ははことも、やまいおおくよわり居り、ながいきもむづかしく、たとえ野山屋敷に御いで候ても、御無事にさ

ためなりけりと知られて、いよいよたのもしく覚ゆるなり。しかしければ本願を信せんには、他の善も要にあらず、念仏にまざるべき善なきゆえに。悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたくるほどの悪なきがゆえにと察して待つていて下さる。そのお心をきましましょう」

病人は這うのをやめた。……信哉は静かに寝せてやり、信哉「お疲れでしょう。御用があつたら又来ますから、遠慮なく、知らせて下さい。」  
雄三は、言葉もなく、丁寧に頭を下げた。  
つつく

夜の月  
野に山にうかれうかれてかえるさを ねやまで  
おくる秋の夜の月 蓮月 尼  
おなじく  
月見つつかえる家路におもうかな 花は人も  
おくらざりけり 植松 茂岳

えこれあり候えは、勢になり、力になり申し候まま、たんに御やめ、御ながらえのほど、いのり参らせ候、この品わざわざとのえさし、送り候まま、ははにたいし御たべ頼みまいらせ候。  
いくえもいくえも御心御ひきかえ、かえすがえすもいのり参らせ候。めで度かしこ  
大様 ははより

(註) この品とありますのは、干柿で松陰先生の好物でありました。「誠足らぬ者」をかくまでも念じ給う御母堂の悲心に遂に心ひらけられたのであります。  
この年の十一月廿一日、江戸の獄で処刑せられます時、親思う心にまざる親心 今日のおとすれ何と聞らむ  
と辞世の歌のありますのも、この母にして、この子ありの感にうたれるのであります。



あとがき

秋も紅葉と共に去つて、野も山も冬気色となりました。「体露金風」という禪家の言葉が思い浮ぶ此頃であります。金風とは秋の風で、これが吹き出すと黄色な木の葉が散つて、枝も幹もそのままあらわれる。その様に仏心のもとによつて外面虚飾が払われて真実の世界があらわれることを説かれたものでありましょう。  
とまれ、秋から冬にかけて、物みながみる時、聞法の最好期であります。御大切に祈念いたします。

故・酒見忠勢先生の講話筆記を四国高松の西村様から御恵送頂き慈光に載せさせて頂きました。先生の略歴を紹介いたします。  
「佐賀県出身、原人論を聞き仏法に好意をもつ。東京勉学中修養に志す。検事として丸亀区裁判所、次に高松地方裁判所。其後思う所あり、検事を辞任、高松市にて弁護士を開業。政界に進出し、高松市会議

員、香川県会議員となり県政の中心人物となる。

近角先生に導かれて真宗の信者となり、暫々上京し面授の教授をうく。

元藏相の三土忠造氏に推挙せられ代議士立候補を強いられ、近角先生に相談のため上京せし時、先生はすでにそのことを感知し居られて大いに叱られ、感服す。

爾来信仰鼓吹に精進し、讃岐求道会の大先達として、座談会、法話会に時を忘る。

免囚保護の修齊会館の早朝礼拝に毎日参詣して和讃の法味をたたえ長年に及ぶ。

昭和二十六年五月十八日、郷里佐賀県嬉野町国立病院にて逝去。時に七十九才。○

御案内

時、十二月五日(木)午後六時半  
所、南区駈上町二ノ八八 一道会館  
幸財童子の求道  
人、福島政雄先生

執筆者住所

鹿児島市葉師町一三八〇 室住 熊三  
高松市五番町四ノ一三 西村 正安  
新潟市関屋堀割三ノ一一 佐藤強三郎

御案内

毎月第一、二、三日曜午後一時半。一道  
会。市電新郊通一丁目下車、東へ一丁半。  
毎月二十四日、午前午後。法話会。昭和  
区小楼町教西寺。市電御器所通下車。楼花  
学園東。

定価 一部 二十五円(送共)

半年 百五十円(送共)

一年 三百円(送共)

名古屋市南区駈上町二ノ八八

編集・発行人 花田 正夫

名古屋市中千種区千種町馬走二八

印刷人 本田 政雄

名古屋市中南区駈上町二ノ八八

発行所 慈光社

振替口座名古屋一〇四七〇番